



卷 頭 言

農 業 の 魅 力

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 鬼形 秀樹
三井東圧化学株式会社 精密化学品事業部長

今毎日のように新聞紙上を賑わしているのが、日本版「ビッグバン」で金融業界を震撼させている。これは「護送船団」行政から「弱肉強食」時代に突入するものといわれ、今まで考えられなかった生命保険会社、銀行の倒産などはまさに改革に向けての胎動が始まっているように感じられる。我々の生活にも様々な分野で大きな影響を受け、「自己責任」を伴うものだけに無関心では居られない。

この日本版「ビッグバン」といわれるものは、橋本内閣の六大改革：行政改革、財政改革、経済構造改革、金融システム改革、社会保障改革、教育改革の内の金融システム改革をさす。どの改革も大きく日本の仕組みを変えるものだといわれている。それだけ大きな改革を目指しているだけに各分野での十分な審議と取り組みが必要で、問題点の先送りだけは避けたいものである。

農業分野でもウルグワイ・ラウンド対策として日本農業の体質強化を目的に、魅力ある21世紀の農業再構築が提唱されている。日本農業の現状は、すでに多くの方が語られているように「食糧自給」「高齢化・後継者問題」「生産コストの低減」など多くの課題が横たわっている。農業は人間が生きていくための食を提供する基幹産業であり、国土の環境保全と言った公益性を持つ産業であるが、食糧の供給と国土・環境保全は時として相反するものとして語られるため問題を難しくしている点でもある。

「1995年度農業・食料関連産業の経済計算」によると国内総生産に占める農業のシェアは1.7%に過ぎないが、これに食品の流通・加工、

外食を加えた農業・食料関連産業全体では10.4%を占め、一大産業分野を形成している。農業は小さい分野ではなく、国民経済の発展に重要な役割を果たしている。この様に考えると基幹をなす農業への理解が全体に乏しいのは何故なのであろうか。

国民にとって農業を維持することの大切さ、すなわち21世紀に向けての世界的な食糧の確保、自給率の向上など各々の命題に対して社会的な論議が沸き上がることが大切である。社会的な論議にするためには、農業を開かれたものにすることが早道ではないだろうか。

教育場面での農業実習、都市と農村の触れ合いによるムラオコシ、新規就農者への援助など地道で長期的な活動が実を結ぶことを願っている。自然と共存して生きる農業を排して社会は成り立たない。自然（命）の大切さの欠如など、現在の様々な問題は2次、3次産業偏重の都市型社会の矛盾から来ているとも思えるものであり、この欠陥を是正し、農業との共生を目指す社会の構築が必要と考える。

弊社も農薬メーカーとして、除草剤の歴史となる時代の節目毎に資材を提供し貢献してきたと自負している。水田の体系除草、一発処理がそれであり、最近では3キロ剤から1キロ剤への移行、フロアブル剤の普及、ジャンボ剤などの投込みなど急速に省力化がすすんでいる。ともすれば、悪者視される農薬に関する誤解を解くと共に、農業の問題点を正面から受け止め、農薬に係わる1メーカーとして、21世紀の魅力ある農業に貢献していきたいと思う。